

犬と笛 芥川龍之介

いく子さんに献ず

一

昔、大和やまとの国葛城山かつらぎやまの麓に、髪長彦かみながひこという若い木樵きこりが住んでいました。これは顔かたちが女のようにやさしくって、その上うえ髪までも女のように長かったものですから、こういう名前をつけられていたのです。

髪長彦かみながひこは、大そう笛ふえが上手でしたから、山へ木を伐きりに行く時でも、仕事の合い間合い間には、腰にさしている笛を出して、独りでその音ねを楽しんでいました。するとまた不思議なことには、どんな鳥獣とりけものや草木くさきでも、笛の面白さはわかるのでしょう。髪長彦がそれを吹き出すと、草はなびき、木はそよぎ、鳥や獣はまわりへ来て、じつとしまいまで聞いていました。

ところがある日のこと、髪長彦はいつもの通り、とある大木の根がたに腰を卸しながら、余念もなく笛を吹いていますと、たちまち自分の目の前へ、青い勾玉まがたまを沢山ぶらさげた、足の一本しかない大男が現れて、

「お前は仲々笛がうまいな。己おれはずっと昔から山奥の洞穴ほらあなたで、神代かみよの夢ばかり見ていたが、お前が木を伐きりに来始めてからは、その笛の音に誘われて、毎日面白い思をしていた。そこで今日はそのお礼に、ここまでわざわざ来たのだから、何でも好きなものを望むが好い。」と言いました。

そこで木樵きこりは、しばらく考えていましたが、

「私わたくしは犬が好きですから、どうか犬を一匹下さい。」と答えました。

すると、大男は笑いながら、

「高が犬を一匹くれなどとは、お前も余っ程欲のない男だ。しかしその欲のないのも感心だから、ほかにはまたとないような不思議な犬をくれてやろう。こう言う己おれは、葛城山かつらぎやまの足一あしひとつの神だ。」と言って、一声高く口笛を鳴らしますと、森の奥から一匹の白犬が、落葉を蹴立てて駈かけて来ました。

足一つの神はその犬を指して、

「これは名を嗅げと言って、どんな遠い所の事でも嗅かぎ出して来る利口な犬だ。では、一生己おれの代りに、大事に飼ってやってくれ。」と言うかと思うと、その姿は霧のように消えて、見えなくなっていました。

髪長彦は大喜びで、この白犬と一しょに里へ帰って来ましたが、あくる日また、山へ行つて、何気なにげなく笛を鳴らしていると、今度は黒い勾玉まがたまを首へかけた、手の一本しかない大男が、どこからか形を現して、

「きのう己の兄きの足一つの神が、お前に犬をやったそうだから、己も今日は礼をしようと思ってやって来た。何か欲しいものがあるのなら、遠慮なく言うが好い。己は葛城山の手一てひとつの神だ。」と言いました。

そうして髪長彦が、また「嗅かげにも負けないような犬が欲しい。」と答えますと、大男はすぐに口笛を吹いて、一匹の黒犬を呼び出しながら、

「この犬の名は飛べと言って、誰でも背中へ乗ってさえすれば百里でも

千里でも、空を飛んで行くことが出来る。明日あしたはまた己の弟が、何かお前に礼をするだろう。」と言って、前のようにどこかへ消え失せてしまいました。

するとあくる日は、まだ、笛を吹くか吹かないのに、赤い勾玉まがたまを飾りにした、目の一つしかない大男が、風のように空から舞い下って、

「己おれは葛城山かつらぎやまの目一めひとつの神だ、兄きたちがお前に礼をしたそうだから、己も嗅げや飛べに劣らないような、立派な犬をくれてやろう。」と言ったと思うと、もう口笛の音が森中にひびき渡って、一匹の斑犬ぶちいぬが牙きばをむき出しながら、駈けて来ました。

「これは噛めという犬だ。この犬を相手にしたが最後、どんな恐い鬼神おにがみでも、きっと一噛ひとかみに噛み殺されてしまう。ただ、己おれたちのやった犬は、どんな遠いところにも、お前が笛を吹きさえすれば、きっとそこへ帰って来るが、笛がなければ来ないから、それを忘れずにいるが好い。」

そう言いながら目一つの神は、また森の木の葉をふるわせて、風のように舞い上ってしまいました。

二

それから四五日たったある日のことです。髪長彦は三匹の犬をつれて、葛城山かつらぎやまの麓にある、路が三叉みつまたになった往来へ、笛を吹きながら来かかりますと、右と左と両方の路から、弓矢に身をかため

た、二人の年若な侍が、遅たくましい馬に跨またがって、しずしずこっちへやって来ました。

髪長彦はそれを見ると、吹いていた笛を腰へさして、叮嚀におしぎをしながら、

「もし、もし、殿様、あなた方は一体、どちらへいらっしゃるのでございます。」と尋ねました。

すると二人の侍が、交かわる交がわる答えますには、

「今度飛鳥あすかの大臣様おおみさまの御姫様が御二方、どうやら鬼神おにがみのたぐいにでもさらわれたと見えて、一晩の中に御行方おんゆくえが知れなくなりました。」

「大臣様は大そうな御心配で、誰でも御姫様を探し出して来たものには、厚い御褒美ごほうびを下さると云う仰せだから、それで我々二人も、御行方を尋ねて歩いているのだ。」

こう云って二人の侍は、女のような木樵きこりと三匹の犬とをさも莫迦ばかにしたように見下みくだしながら、途を急いで行ってしまいました。

髪長彦は好い事を聞いたと思いましたから、早速白犬の頭を撫でて、

「嗅かけ。嗅げ。御姫様たちの御行方を嗅ぎ出せ。」と云いました。

すると白犬は、折から吹いて来た風に向って、しきりに鼻をひこつかせていましたが、たちまち身ぶるいを一つするが早いか、

「わん、わん、御姉様おあねえさまの御姫様は、生駒山いこまやまの洞穴ほらあなに住んでいる食蜃人しょくしんじんの虜とりこになっています。」と

答えました。食蜃人しょくしんじんと云うのは、昔八岐やまたの大蛇おろちを飼っていた、途方もない悪者なのです。

そこで木樵きこりはすぐ白犬と斑犬ぶちいぬとを、両方の側わきにかかえたまま、黒犬の背中に跨って、大きな声でこう云いつけました。

「飛べ。飛べ。生駒山いこまやまの洞穴ほらあなに住んでいる食蜃人の所へ飛んで行け。」

その言ことばが終らない中うちです。恐しいつむじ風が、髪長彦の足の下から吹き起ったと思いますと、まるで一ひらの木この葉のように、見る見る黒犬は空へ舞い上って、青雲あおぐもの向うにかくれている、遠い生駒山の峰の方へ、真一文字に飛び始めました。

三

やがて髪長彦かみながひこが生駒山いこまやまへ来て見ますと、成程山の中程に大きな洞穴ほらあなが一つあって、その中に金の櫛くしをさした、綺麗きれいな御姫様おひめさまが一人、しくしく泣いていらっしやいました。

「御姫様、御姫様、私わたくしが御迎えにまいりましたから、もう御心配には及びません。さあ、早く、御父様おとうさまの所へ御帰りになる御仕度をなすって下さいまし。」

こう髪長彦が云いますと、三匹の犬も御姫様の裾や袖を啣くわえながら、

「さあ早く、御仕度をなすって下さいまし。わん、わん、わん、」と吠えました。

しかし御姫様は、まだ御眼に涙をためながら、洞穴の奥の方をそっと指さして御見せになって、

「それでもあすこには、私わたしをさらって来た食蜃人が、さつきから御酒に酔って寝ています。あれが目をさましたら、すぐに追いかけて来るでしょう。そうすると、あなたも私も、命をとられてしまうのにちがいありません。」と仰有おっしゃいました。

髪長彦はにっこりほほ笑んで、

「高の知れた食蜃人なぞを、何でこの私わたくしが怖こわがりましょう。その証拠には、今ここで、訳わけなく私が退治して御覧に入れます。」と云いながら、斑犬ぶちいぬの背中を一つたたいて、

「噛め。噛め。この洞穴の奥にいる食蜃人を一噛みに噛み殺せ。」と、勇ましい声で云いつけました。

すると斑犬はすぐ牙きばをむき出して、雷かみなりのように唸うなりながら、まっしぐらに洞穴の中へとびこみましたが、たちまちの中にまた血だらけな食蜃人の首を啣くわえたまま、尾をふって外へ出て来ました。

ところが不思議な事には、それと同時に、雲で埋うずまっている谷底から、一陣の風がまき起りますと、その風の中に何かいて、

「髪長彦さん。難有ありがとうございます。この御恩は忘れません。私は食蜃人にいじめられていた、生駒山の駒姫こまひめです。」と、やさしい声で云いました。

しかし御姫様は、命拾いをなすった嬉しさに、この声も聞えないような御容子ごようすでしたが、やがて髪長彦の方を向いて、心配そうに仰有おっしゃいますには、

「私わたくしはあなたのおかげで命拾いをしましたが、妹は今時分どこでどんな目に逢あつて居りましょう。」

髪長彦はこれを聞くと、また白犬の頭を撫なでながら、

「嗅げ。嗅げ。御姫様の御行方を嗅ぎ出せ。」と云いました。と、すぐに白犬は、

「わん、わん、御妹おいもご様の御姫様は笠置山かさぎやまの洞穴ほらあなに棲すんでいる土蜘蛛つちぐもの虜とりこになっています。」と、主人の顔を見上げながら、鼻をびくつかせて答えました。この土蜘蛛と云うのは、昔神武天皇じんむてんのう様が御征伐になった事のある、一寸法師いっすんぼうしの悪者なのです。

そこで髪長彦は、前のように二匹の犬を小脇こわきにかかえて御姫様と一しよに黒犬の背中へ跨りながら、

「飛べ。飛べ。笠置山の洞穴に住んでいる土蜘蛛の所へ飛んで行け。」と云いますと、黒犬はたちまち空へ飛び上って、これも青雲のたなびく中に聳えている笠置山へ矢よりも早く駈け始めました。

四

さて笠置山かさぎやまへ着きますと、ここにいる土蜘蛛つちぐもはいたつ

て悪知恵わるぢえのあるやつでしたから、髪長彦かみながひこの姿を見る
が早いか、わざとにこにこ笑いながら、洞穴ほらあなの前まで迎えに出て、
「これは、これは、髪長彦さん。遠方御苦勞でございました。まあ、こつち
へおはいりなさい。碌ろくなものはありませんが、せめて鹿の生胆いきぎもか
熊の孕子はらみごでも御馳走ごちそうしましょう。」と云いました。

しかし髪長彦は首をふって、

「いや、いや、己おれはお前がさらって来た御姫様をとり返しにやって来
たのだ。早く御姫様を返せばよし、さもなければあの食蜃人しょくしんじん同
様、殺してしまうからそう思え。」と、恐しい勢いで叱りつけました。

すると土蜘蛛は、一ちぢみにちぢみ上って、

「ああ、御返し申しますとも、何であなたの仰有おっしゃる事に、いやだな
どと申しましょう。御姫様はこの奥にちゃんと、独りでいらっしゃいます。どう
か御遠慮なく中へはいって、御つれになって下さいまし。」と、声をふるわ
せながら云いました。

そこで髪長彦は、御姉様の御姫様と三匹の犬とをつれて、洞穴の
中へはいりますと、成程ここにも銀の櫛くしをさした、可愛らしい御姫様が、
悲しそうにしくしく泣いています。

それが人の来た容子ようすに驚いて、急いでこちらを御覧になりました
が、御姉様おあねえさまの御顔を一目見たと思うと、

「御姉様。」

「妹。」と、二人の御姫様は一度に両方から駈けよって、暫くは互に抱
だき合ったまま、うれし涙にくれていらっしゃいました。髪長彦もこの気色け

しきを見て、貰い泣きをしていましたが、急に三匹の犬が背中の中の毛を逆立さかだてて、

「わん。わん。土蜘蛛つちぐもの畜生め。」

「憎いやつだ。わん。わん。」

「わん。わん。わん。覚えていろ。わん。わん。わん。」と、気の違ったように吠え出しましたから、ふと気がついてふり返えると、あの狡猾こうかつな土蜘蛛は、いつどうしたのか、大きな岩で、一分の隙すきもないように、外から洞穴の入口をぴったりふさいでしまいました。おまけにその岩の向うでは、

「ざまを見ろ、髪長彦め。こうして置けば、貴様たちは、一月とたたない中に、ひぼしになって死んでしまうぞ。何と己様おれさまの計略は、恐れ入ったものだろう。」と、手を拍たたいて土蜘蛛の笑う声がしています。

これにはさすがの髪長彦も、さては一ぱい食わされたかと、一時は口惜しかりましたが、幸い思い出したのは、腰にさしていた笛の事です。この笛を吹きさえすれば、鳥獣とりけものは云うまでもなく、草木くさきもうつとり聞き惚ほれるのですから、あの狡猾こうかつな土蜘蛛も、心を動かさないと限りません。そこで髪長彦は勇気を取り直して、吠えたける犬をなだめながら、一心不乱に笛を吹き出しました。

するとその音色ねいろの面白さには、悪者の土蜘蛛も、追々おいおい我を忘れたのでしょ。始は洞穴の入口に耳をつけて、じっと聞き澄ましていましたが、とうとうしまいには夢中になって、一寸二寸と大岩を、少しずつ側わきへ開きはじめました。

それが人一人通れるくらい、大きな口をあいた時です。髪長彦は急に

笛をやめて、

「噛め。噛め。洞穴の入口に立っている土蜘蛛を噛み殺せ。」と、斑犬ぶちいぬの背中をたたいて、云いつけました。

この声に胆をつぶして、一目散に土蜘蛛は、逃げ出そうとしましたが、もうその時は間に合いません。「噛め」はまるで電いなずまのように、洞穴の外へ飛び出して、何の苦もなく土蜘蛛を噛み殺してしまいました。

所がまた不思議な事には、それと同時に谷底から、一陣の風が吹き起って、

「髪長彦さん。難有ありがとう。この御恩は忘れません。私わたしは土蜘蛛にいじめられていた、笠置山かさぎやまの笠姫かさひめです。」とやさしい声が聞えました。

五

それから髪長彦かみながひこは、二人の御姫様と三匹の犬とをひきつれて、黒犬の背に跨がりながら、笠置山かさぎやまの頂から、飛鳥あすかの大臣様おおみさまの御出になる都の方へまっすぐに、空を飛んでまいりました。その途中で二人の御姫様は、どう御思いになったのか、御自分たちの金の櫛と銀の櫛とをぬきとって、それを髪長彦の長い髪へそっとさして御置きになりました。が、こっちは元よりそんな事には、気がつく筈がありません。ただ、一生懸命に黒犬を急がせながら、美しい大和やまどの国原くにはらを足の下に見下して、ずんずん空を飛んで行きました。

その中に髪長彦は、あの始めに通りがかった、三つ又またの路の空まで、犬を進めて来ましたが、見るとそこにはさっきの二人の侍が、どこからかの帰りと見えて、また馬を並べながら、都の方へ急いでいます。これを見ると、髪長彦は、ふと自分の大手柄を、この二人の侍たちにも聞かせたいと云う心もちが起って来たものですから、

「下りろ。下りろ。あの三つ又またになっている路の上へ下りて行け。」と、こう黒犬に云いつけました。

こっちは二人の侍です。折角方々探しまわったのに、御姫様たちの御行方がどうしても知れないので、しおしお馬を進めていると、いきなりその御姫様たちが、女のような木樵きこりと一しよに、遅たくましい黒犬に跨って、空から舞い下って来たのですから、その驚きと云ったらありません。

髪長彦は犬の背中を下りると、叮嚀にまたおじぎをして、

「殿様、私わたくしはあなた方に御別れ申してから、すぐに生駒山いこまやまと笠置山かさぎやまとへ飛んで行って、この通とおり御二方の御姫様を御助け申してまいりました。」と云いました。

しかし二人の侍は、こんな卑しい木樵きこりなどに、まんまと鼻をあかさされたのですから、羨うらやましいのと、妬ねたましいのどで、腹が立って仕方がありません。そこで上辺うわべはさも嬉しそうに、いろいろ髪長彦の手柄を褒ほめ立てながら、とうとう三匹の犬の由来や、腰にさした笛の不思議などをすっかり聞き出してしまいました。そうして髪長彦の油断をしている中に、まず大事な笛をそつと腰からぬいてしまうと、二人はいきなり黒犬の背中へとび乗って、二人の御姫様と二匹の犬とを、しっかりと両脇に抱え

ながら、

「飛べ。飛べ。飛鳥あすかの大臣様おおみさまのいらっしゃる、都の方へ飛んで行け。」と、声を揃えて喚わめきました。

髪長彦は驚いて、すぐに二人へとびかかりましたが、もうその時には大風が吹き起って、侍たちを乗せた黒犬は、きりりと尾を捲まいたまま、遙な青空の上の方へ舞い上って行ってしまいました。

あとにはただ、侍たちの乗りすてた二匹の馬が残っているばかりですから、髪長彦は三つ叉になった往来のまん中につつぶして、しばらくはただ悲しそうにおいおい泣いておりました。

すると生駒山いこまやまの峰の方から、さっと風が吹いて来たと思えますと、その風の中に声がして、

「髪長彦さん。髪長彦さん。私わたしは生駒山の駒姫こまひめです。」と、やさしい囁ささやきが聞えました。

それと同時にまた笠置山かさぎやまの方からも、さっと風が渡るや否や、やはりその風の中にも声があって、

「髪長彦さん。髪長彦さん。私わたしは笠置山の笠姫かさひめです。」と、これもやさしく囁きました。

そうしてその声の一つになって、

「これからすぐに私わたしたちは、あの侍たちの後あとを追って、笛をとり返して上げますから、少しも御心配なさいませぬ。」と云うか云わない中うちに、風はびゅうびゅう唸りながら、さっき黒犬の飛んで行った方へ、狂って行ってしまいました。

が、少したつとその風は、またこの三つ又またになった路の上へ、前のようにやさしく囁きながら、高い空から下おろして来ました。

「あの二人の侍たちは、もう御二方の御姫様と一しよに、飛鳥あすかの大臣様おおみさまの前へ出て、いろいろ御褒美ごほうびを頂いています。さあ、さあ、早くこの笛を吹いて、三匹の犬をここへ御呼びなさい。その間あいだに私たちは、あなたが御出世の旅立を、恥しくないようにして上げましょう。」

こう云う声がしたかと思うと、あの大事な笛を始め、金の鎧よろいだの、銀の兜かぶとだの、孔雀くじゃくの羽の矢だの、香木こうぼくの弓だの、立派な大将の装いが、まるで雨か霰あられのように、眩まぶしく日に輝きながら、ばらばら眼の前へ降って来ました。

六

それからしばらくたって、香木の弓に孔雀の羽の矢を背負しよった、神様のような髪長彦かみながひこが、黒犬の背中に跨りながら、白と斑ぶちと二匹の犬を小脇にかかえて、飛鳥あすかの大臣様おおみさまの御館おやかたへ、空から舞い下って来た時には、あの二人の年若な侍たちが、どんなに慌て騒ぎましたろう。

いや、大臣様でさえ、あまりの不思議に御驚きになって、暫くはまるで夢のように、髪長彦の凜々りりしい姿を、ぼんやり眺めていらっしやいました。

が、髪長彦はまず兜かぶとをぬいで、叮嚀に大臣様に御じぎをしなから、

「私わたくしはこの国の葛城山かつらぎやまの麓に住んでいる、髪長彦と申すものでございますが、御二方の御姫様を御助け申したのは私で、ここにおります御侍たちは、食蜃人しょくしんじんや土蜘蛛つちぐもを退治するのに、指一本でも御動かしになりは致しません。」と申し上げました。

これを聞いた侍たちは、何しろ今までは髪長彦の話した事を、さも自分たちの手柄らしく吹聴していたのですから、二人とも急に顔色を変えて、相手の言ことばを遮りながら、

「これはまた思いもよらない嘘をつくやつでございます。食蜃人の首を斬ったのも私わたくしたちなら、土蜘蛛つちぐもの計略を見やぶったのも、私たちに相違ございません。」と、誠しやかに申し上げました。

そこでまん中に立った大臣様おおおみさまは、どちらの云う事がほんとうとも、見きわめが御つきにならないので、侍たちと髪長彦を御見比べなさりながら、

「これはお前たちに聞いて見るよりほかはない。一体お前たちを助けたのは、どっちの男だったと思う。」と、御姫様たちの方を向いて、仰有おっしゃいました。

すると二人の御姫様は、一度に御父様の胸に御すがりになりながら、
「私わたしたちを助けたのは、髪長彦でございます。その証拠には、あの男のふさふさした長い髪に、私たちの櫛をさして置きましたから、どうかそれを御覧下さいまし。」と、恥しそうに御云いになりました。見ると成程、

髪長彦の頭には、金の櫛と銀の櫛とが、美しくきらきら光っています。

もうこうなっては侍たちも、ほかに仕方はございませんから、どうどう大臣様の前にひれ伏して、

「実は私わたくしたちが悪だくみで、あの髪長彦の助けた御姫様を、私たちの手柄のように、ここでは申し上げたのでございます。この通り白状致しました上は、どうか命ばかりは御助け下さいまし。」と、がたがたふるえながら申し上げました。

それから先の事は、別に御話しするまでもありますまい。髪長彦は沢山御褒美を頂いた上に、飛鳥あすかの大臣様の御婿様おむこさまになりましたし、二人の若い侍たちは、三匹の犬に追いまわされて、ほうほう御館おやかたの外へ逃げ出してしまいました。ただ、どちらの御姫様が、髪長彦の御嫁さんになりましたか、それだけは何分昔の事で、今でははっきりとわかっておりません。

(大正七年十二月)